

世界凧博物館 八日市大凧会館

平成16年10月17日(日)

八日市の凧の由来

江戸時代中期(約300年前)から、男子の出生祝いとして5月の節句に凧あげが行われ、天保年間(1830~43)から凧が大型化するとともに、豊作や村の行事などにあげられるようになった。大型化にともない、長巻法(大凧の縦骨を取り外し、巻いて運搬する)が考案された。

大凧の歴史

明治になると国家的行事の記念として大凧があげられるようになり、明治15(1882)年には、240畳の大凧(11間×11間=19.8m×19.8m)があげられた。最近では、昭和59(1984)年に市制30周年を記念して、220畳の大凧があげられた。現在でも毎年5月下旬の日曜日(旧暦の端午の節句)に、100畳の大凧(13×12m、重量700kg)があげられている。

大凧の製作

八日市は内陸にあるため、必ずしも風が強い地域とはいえない。このため、凧の紙の部分にスカシを入れて軽量化するなど、様々な工夫が施されている。ただ、近年まで、中野、芝原、金屋の3つの大字が互いに競い合って大凧を製作したため、製作に関してのノウハウは秘密にされていたという。平成3(1991)年に製作した100畳凧には、6寸竹約50本、特製手漉き美濃和紙(90×60cm)360枚、糊18リットル、製作のべ人数250人(1人1日6時間)であった。製作費用で約100万円という。現在の重要課題は、人手をいかに集めるかである。

本当にあがるのか

巨大な大凧あげは、100人規模の人びとによる、絶妙のチームワークの結晶である。大字中野の役割分担は、

合図1人：経験豊かなもの

龍頭2人：釣り糸の総元締め

吹貫2人：風力測定係り

凧元32人：凧をつき起こすための刺股8人、凧の揺れをコントロールするもの左右5人で計10人、実際に凧をつき起こすもの4人、綱を鳥居形にかけて引き起こすもの6人、予備4人

蛸係24人：1つの蛸(チーム)に8人で3つの蛸

糸元20人：年寄りが担当

走役130人：合図によって綱を持って走る

糸目付5人：綱が切れないように監督する

合計216人

である。ただし、こうした役割分担や人数の配置は、凧の大きさや字によって異なる。

高さ13mの巨大な物体が空中を浮遊するのは、ほとんど驚異の光景である。ただ、実際にあがっている時間はそれほど長くなく、平成5(1993)年には、100畳の凧が2時間5分の間、大空を舞った。明治12(1879)年には、10間×10間(18×18m)が日没まであがっていたので、高張提灯をつけて帰ったという。

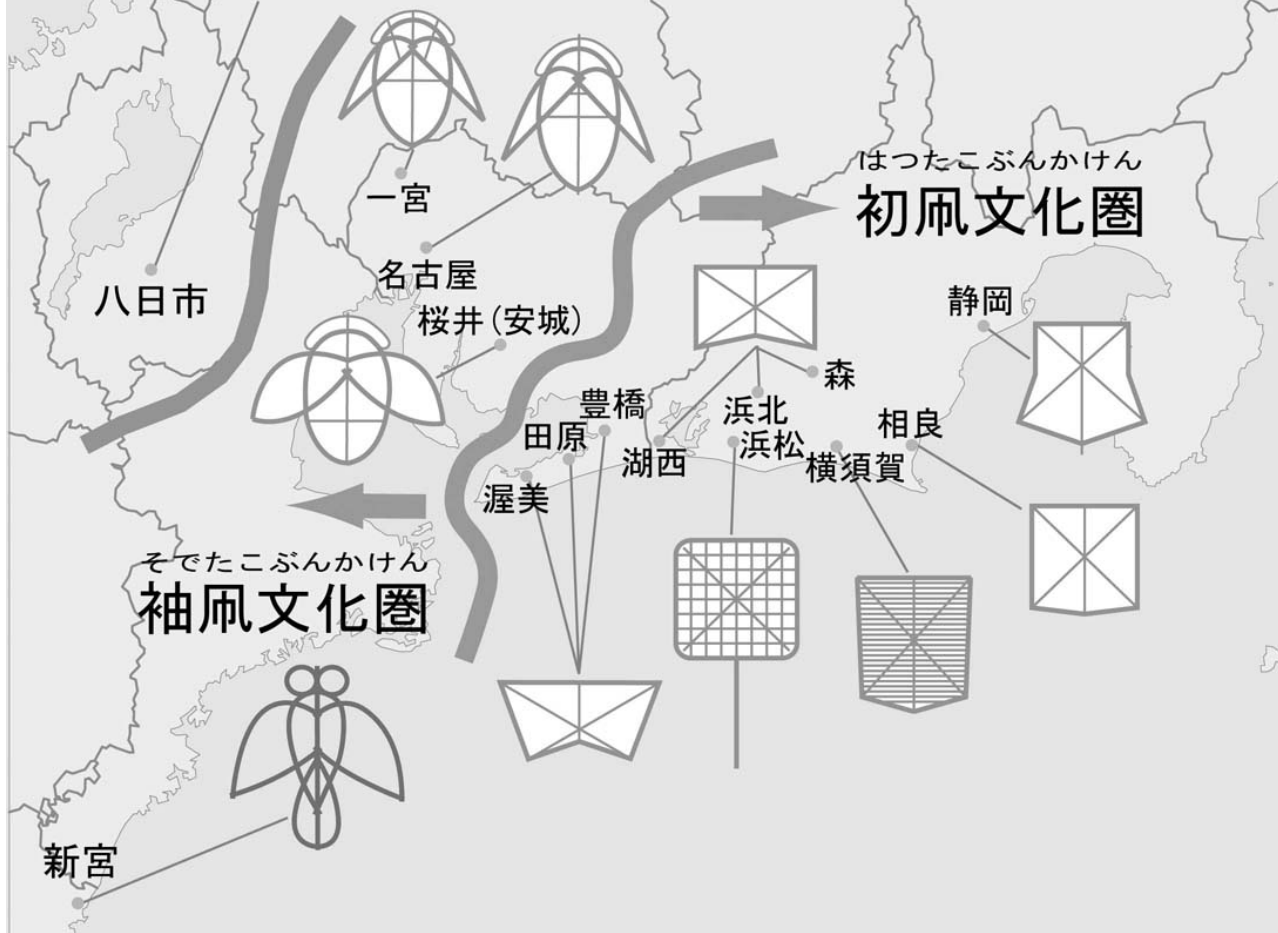
判じもん

八日市の凧のもうひとつの特徴は、凧のデザインに込められたメッセージである。文字と絵柄を組み合わせ、なぞなぞのように見るものに問いかけることから「判じもん」と呼ばれる。以前は、「国体堅固」(明治24年・1891年)、「赤心報国」(明治29年・1896年)という国家的な内容だったが、最近では「大凧と緑のまち八日市」(平成3年・1991年)、「碧い地球を大切に」(平成13年・2001年)となっている。

東海地方の 凧の形の分布



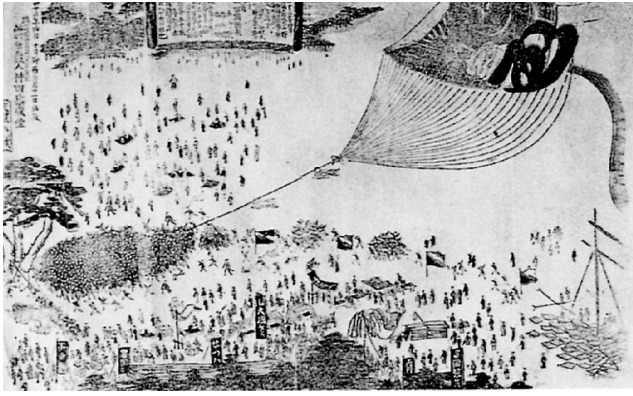
100畳の大凧あげ



「国体堅固」(明治24年・1891年)



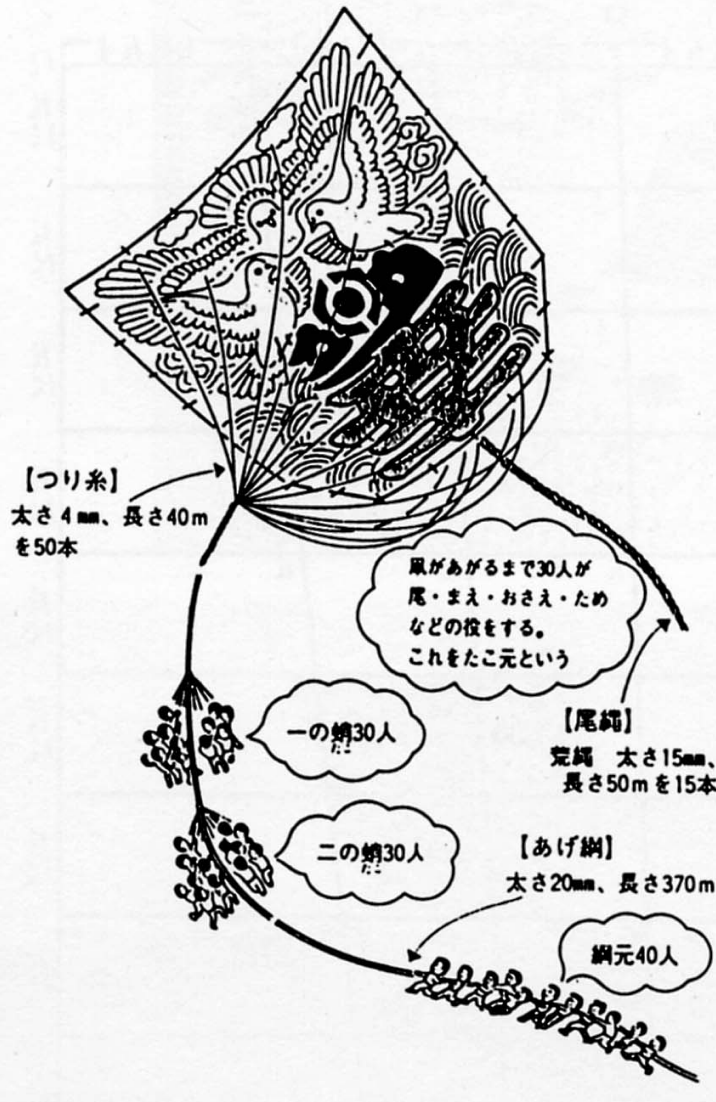
「赤心報国」(明治29年・1896年)



「富国強兵」(明治42年・1909年)
 明治38・39年の日露戦争の凱旋祝



「大凧と緑のまち八日市」(平成3年・1991年)



平成3年「大凧と緑のまち八日市」の人員配置

明治の頃に歌われた凧歌

風の神様風おくれ
 あがったら返すでみなおくれ
 うらの凧はよいけれど
 風が吹かんとあがらんで
 風の神様かぜおくれ

風の神様かぜおくれ
 あがったら返すでみなおくれ
 あいつの凧はあがらん凧よ
 あいつにややらあがらんように
 風の神様かぜおくれ

風の神様かぜおくれ
 あがったら返すでみなおくれ
 わしらの所在の凧の絵は
 下手な絵でも理詰めにかなう
 風の神様かぜおくれ

風の神様かぜおくれ
 あがったら返すでみなおくれ
 酒と綱では凧あげできぬ
 赤い鉢巻しめてるで
 風の神様かぜおくれ

風の神様かぜおくれ
 あがったら返すでみなおくれ
 うらの凧は天まであがる
 あいつの凧は水田におちる
 風の神様かぜおくれ

全国の大凧あげ

五十崎（愛媛県五十崎町）

5月3～5日（新暦端午の節句）

鎌倉時代以来、季節に関係なくあげられていたものが、江戸時代に男児誕生の初節句を祝ってあげられるようになった。五十崎方と天神方との間で凧合戦も行われた。

各家ごとの祝い凧とともに、各町で3×4mの出世凧を作り、男凧には男児の、女凧には女児の名前を書いて神事の後にあげる。合戦用の凧は1.9×1.36mで、ガガリ（雁木）で糸を切りあう。



浜松（静岡県浜松市）

5月3～5日（新暦端午の節句）

永禄年間（1558～69）に引間城（現浜松城）城主に男児が生まれたことを祝って城中高く凧あげが行われたことが起源といわれる（疑問が多い）。

168町内ごとに凧や半被などのデザインが統一される。

初節句を祝う初凧がまず行われ、その後凧合戦となる。夜は初練という祝宴が開かれる。

8畳凧で3.3m四方、約10kg。



白根（新潟県白根市）

6月上旬（旧暦の端午の節句）

元文2（1737）年、堤防改修の竣工を祝って白根の人々が大凧をあげたが、対岸の西白根に落ち民家や農地を荒らした。西白根の人々は怒り、大凧を白根に落として仕返しした。これが起源となって、中之口川の対岸をはさんで凧合戦が行われるようになった。

角凧は7.3×5.5mで200kg、六角凧は高さ3m。毎年150枚程度の凧が凧合戦のために費やされる。



八日市

宝珠花（埼玉県庄和町）

5月3～5日（新暦端午の節句）

享保13（1728）年、僧・浄信が養蚕の占いとして凧あげの話をしたことに始まる。

高さ15m、幅11m、重量800kg。大凧の中央には、その年に初節句をむかえる子どもたちの名前を書いた紙が貼り付けられ、神官により祝詞が奏上される。

毎年けが人が出るため、救急車が待機しての凧あげとなる。



鳴門（徳島県鳴門市）

6月～7月

元禄5（1692）年、蓮花寺再建の上棟式に、棟梁又右衛門によって宇陀紙50枚の円形凧があげられたことにより、「わんわん」と呼ばれる。

昭和12年には直径13.2尺（23.8m）の巨大な凧があげられた。凧あげの前に、砂浜に電柱を植え込んで基礎を作るといふ大掛かりなもの。



相模原（神奈川県相模原市）

5月6～7日（新暦端午の節句）

天保年間に子どもの誕生を祝ってあげたことに始まる。

12.6m四方で、約1000kg。

座間（神奈川県座間市）

5月6～7日（新暦端午の節句）

文政年間（1818～29）、大地主や豪商に男児が誕生すると、その初節句に大凧をあげて祝ったという。10m四方で約560kg。